

もっと優しくできたのでは

25班 きのくに漢方クリニック

田中 一

5月30日月曜日、自院に「臨時休診」の貼り紙をし、伊丹空港に向かう。

台風2号に追い立てられ、座席数76のJAL 2183便は、揺れた。

雨に濡れた新緑の北上山地を横切った我々を迎えたのは、波しぶき煙る太平洋と、夕闇の中に静かに横たわる廃墟であった。

山田町は、壊れていた。

変わり果てたこの場所では、今までと同じ気持ちでは、とても生きられないだろう。

よく知る故郷を、日常を壊された人々の心細さを思うと、胃がきりきりと痛んだ。

豊間根地区と大沢地区の避難所を回った。先発隊の皆さんの貢献のおかげで、「和歌山の医療チーム」と名乗ると、どの場所でも、旧知の顔なじみであるかのように迎えてくれた。詳しい自己紹介なしで診察に入れるのは、とてもありがたかった。

避難所での生活が、落ち着いて（といってよいものかどうか迷いはあるが）いるのか、皆さんの表情は、総じて穏やかであった。もちろん中には、見えないバリアをまとった方もいらしたが、少数であり、思い切って「体調はいかがですか」と声をかけると、訥々と、答えてくれた。

保健師の佐々木さん、濱登さんが、診察を要する方を選んで下さっており、診療は円滑であった。

3日目に、山田町役場・豊間根支所のすぐ近くの民家で診察依頼を受けた。

被害を受けていない、古いが立派な屋敷の日の当たる和室には、生まれて40年間外出していないという先天性疾患の女性が横たわっていた。横浜から帰郷した姉が、脱水を心配

し連絡したという。

「二十歳まで生きられんと、お医者さんには言われてたけどねえ」日焼けした老父が、穏やかに話す。疲れのせい、母は、無表情でうなづく。

「猫鳴き症候群、股関節脱臼」と書かれたセピア色の身障者手帳と、痩せこけ、関節が不自然に曲がった患者さんを目の前に、岩手の地で、初めて目にする究極の慢性疾患の患者さんとの、出会いの不思議さを感じずにはいられなかった。

言葉を交わすことはできないが、彼女の目の光は強く、重症ではなかった。ファースト・コンタクト時の軽い狼狽は、おそらく、周りの人たちには悟られていなかった、と思う。

避難所での営みを見て考えた。震災後80日余り経つと、重要なのはやはり生活の再建である。衣食住である。被災しなかったものが、もっと細やかに、手助けをすべきだと思う。

避難所生活は、様々な援助はあるにしろ、主には避難者の適応力によって成立している。何の罪もない彼らは、もっとわがままを言ってもいいと思う。心がずさんで、乱暴になっても仕方ない、とさえ思う。

そうならない東北人のモラルの高さが、海外で称賛の的らしい。私はそれに違和感がある。

少しおとなしすぎるのではないか。「野生動物」的なたくましが薄れ、「人間」として、社会に飼われ過ぎなのではないか。

支える社会の側にも言いたい。私たちを泊めてくれる宿があるなら、一人でも多くの弱った被災者を宿に招待すべきではないか。足腰の弱った老人に町の調剤薬局を紹介するよりは、手持ちの薬を手渡すべきではないか。

公平性、地域性、地元の意向を忖度するのも大切だとは思う。今後の生活に備え、早期自立を促すことも大切かもしれない。しかし避難所生活を目の当たりにすると、非常時に

は、もっと「分かりやすい親切さ」こそが必要ではないか、と感じずにはいられない。

公平性よりももっと、「辛い人に、出来るだけ我慢を強くない」術を考えてもよいのではないか。「薬を薬局に取りに行けない」のは、わがままとも言えないと思うのだ。

関係者の皆様の、大変なご苦勞を想像し、感謝を申し上げます。

この貴重な体験を、一生かけて、じっくり吟味したいと思う。

震災発生後3ヶ月弱の時期の活動内容

26班 本多内科 本多 康之

和歌山県医療救護班として活動させていたいただきましたので、ご報告させていただきます。私たちが派遣されたのは6月2日から6月6日までの5日間でした。震災発生後3ヶ月弱の時期です。

既に全てにおいてシステムチックに動いていました。和歌山県として継続的に1チームに医療活動させ、各チームを5日単位で派遣するというシステムができあがっていました。病院のチームや医師会のチームが混在しているのですが、日程調整もきちんとしてくださっていました。また、宿泊ホテル、航空券、レンタカーの手配もしてくださっていました。現地の和歌山県の基地に診療機器、薬剤、通信機器なども用意されていて、自分の着替え程度をもっていけば活動できるという恵まれた状況でした。

診療も、気疲れはするものの、負担は大きくはありませんでした。我々は岩手県山田町の2つの地区の担当で、その地区の避難所、グループホームを巡回するとともに、往診の依頼があれば在宅にも赴くという役割でした。現地の医療機関が再開しはじめているということもあり、患者数は1日平均10名程度でした。

ご参考までに、一番忙しかった日の活動報告書を下記に転記します。

- 05:15 ホテル古窯出発、25班から主要ポイントの道案内をしてもらう
- 09:30 当日予定会議（山田町保健センター1F）
- 10:00 巡回診療開始（グループホーム・マブル）
- 11:00 巡回診療開始（グループホーム・とよまね2号館）
- 11:45 在宅訪問診療1軒
- 12:30 昼食
- 13:30 巡回診療開始（豊間根生活支援センター）
- 14:00 在宅訪問診療1軒
- 14:40 巡回診療開始（豊間根中学校格技場）
- 15:00 巡回診療開始（豊間根体育館）
- 16:30 往診（豊間根生活支援センター）
- 18:00 全体ミーティング（山田保健センター2F）
- 19:00 ホテル古窯到着

さて、個人開業医としては、自院のことが気がかりで、ボランティアに参加されなかった先生も多いかと思います。

私の場合は5月12日に柏井県医師会長からのお電話で派遣日を知りました。派遣の21日前です。さっそく、休診のお知らせを院内に掲示するとともに、地方紙2誌に広告を出しました。また、その時期に定期処方薬がなくなりそうな患者を電子カルテの検索機能を使ってリストアップし、電話連絡しました。

休診中に来院する患者は1日4-5人程度で、受付事務員に近所のクリニックに誘導してもらいました。定期処方薬がある患者には、誘導先の先生にみていただけるように処方内容を印刷してお渡ししました。

誘導先の先生にはご迷惑をおかけしてしまいましたが、大きなトラブルなく終えることができました。

最後になりますが、同じチームで活動してくださった江口暢洋薬剤師（エグチ薬局）、

中野文代看護師（国保日高総合病院）、矢戸光季氏（医療法人愛晋会中江病院）に感謝申し上げます。みなさんモチベーションが高く、快く仕事ことができました。

また、和歌山県立医大中先生、医師会の皆様、県対策本部の皆様、完璧にサポートして下さりありがとうございました。



また、ここで必ず診療を再開します。

